くまもとの海に生きる

父は人、母は貝。海を揺りかごに育ちます。

真珠養殖場を訪ねて。

生まれながらにして、すでに光り輝いている唯一の宝石―真珠。その高貴で優しい輝きは、あくまで真珠貝と海が不思議な力でつくりあげるもの。しかし、装飾品としてポピュラーな人気を誇る真珠も、養殖ものとなると話は別。大変な労力と愛情を母貝につぎ込んで、良質品はわずかの割合でしか採れないと言います。

養殖真珠の秘密を探りに、天草・河浦町を訪れてみました。

パールラインという愛称の通り、天草は真珠の島。海岸線を走って行くと、海の上に真珠養殖用の黒いブイが並んでいます。

天草は六月、真珠の種となる玉入れ作業のシーズン。小さな学校の校舎を思わせる平家建ての作業所では、三十名の玉入れさんたちが十センチ程に育った真珠貝（母貝）に、たね玉となる核と「ピース」と呼ばれる外套膜の細胞片を挿入していました。

「いやあ、自分が入れたものが、立派な輝きを持って三年後貝から出たときにゃ、何とも言えんですね。我が子と同じ、いやそれ以上かも知れんな。」と、平賀徳明さん。平賀さんは真珠の玉入れ三十五年の大ベテランです。

四月から十月まで、一日に八百～千個の貝に玉を抱かせる作業は、一見単調に見えますが、真珠作りにとっては、命とも言えるもの。入れる部位や大きさ、方向などすべて玉入れさんのカンと指先のコツに頼っているので、出来る真珠も人によって違ってきます。極めてデリケートな神経を要する作業です。愛着もやる気も出るはず。母貝を入れた籠ごとには、玉入れさんの名札が下げられていました。**いい真珠は、こうして出来る。**

ところで、いい真珠は名前の通り真円でキメ細かいのが条件。色は好みもありますが、一般にピンク系が喜ばれるとのこと。生産量全国四位の熊本県は、品質にかけては常にトップ。真珠貝の生育に適した気候もさることながら、玉入れの技術やその後の管理の行き届き方が大きくものを言います。機械化が進んだ今日でも、手仕事と呼べる作業が大部分です。なかでも、水温と塩分濃度の調整が生命線。**その変化に応じて、貝の入った籠を上げたり降したりしなければ、貝の健康は維持できません。**

昭和五十七年の長崎大水害の時、海面から五メートルまでがまったくの真水になってしまいました。籠をつるすロープの長さは五メートル。このままでは貝は全滅です。その日は休日でしたが、それどころではありません。四百名の従業員総動員で、手に手に三メートルのロープを握り、まさに人海戦術で籠のロープの長さを継ぎ足して回り、貝の生命を守ったそうです。

その他、貝の表面に付着した汚れや害敵を取り除いたりするのも、必要な仕事。夏場は一週間とあけずに行うのだとか……。

いやはや、聞いているだけで、あまりの手の掛かりようにボーッとなってしまいました。それ程大切に育てても、二～三年後の玉出しの時まで無事生き残り、真珠と呼べるものが採れるのは、三割弱。さらに良質のものとなると、二パーセント。なるほど、高価なのもうなずけます。

「玉磨かざれば光りなし」すべての宝石にあてはまるこのことわざも、ことに真珠に限っては通用しません。**しかし、生まれながらの美を誘る真珠も、それを育てる人たちの苦心と愛情があって初めて、輝きを増せるのだということを知りました。**自然の宝石にして、手の温もりのする輝き。身につける人を優しい気持ちにしてくれるその輝きは、惜しみなく注がれた愛情のせいでもあるようです。

真珠の玉入れ作業